

鶴岡工業高等専門学校

教育研究年次報告

第2号

ANNUAL REPORT ON EDUCATION AND RESEARCH
OF
NATIONAL INSTITUTE OF TECHNOLOGY(KOSEN), TSURUOKA COLLEGE
No. 2

2025

鶴岡工業高等専門学校

鶴岡工業高等専門学校教育研究年次報告 第2号
(2026年3月)

————— 目 次 —————

<研究ノート(査読なし)>

遠藤 大希：薩州商社による日本海北前船経済圏構想とその特異性 1

<教育・指導論文(査読なし)>

森木 三穂：『結ひの古典』を用いた古典教育(二) —小袖をデザインする— 1

ANNUAL REPORT ON EDUCATION AND RESEARCH
OF
NATIONAL INSTITUTE OF TECHNOLOGY(KOSEN), TSURUOKA COLLEGE
No. 2
MARCH 2026

————— Contents —————

Hiroki T ENDO

The Yamato Company's Vision for the Kitamaebune Ecosystem in the Nihon-kai (Sea of Japan) 1

Miho MORIKI

Classical literature education using "YUI no KOTEN" II 1

薩州商社による日本海北前船経済圏構想とその特異性

遠藤 大希

The Yamato Company's Vision for the Kitamaebune Ecosystem in the Nihon-kai (Sea of Japan)

Hiroki T ENDO

(Received on Jan. 30, 2026)

キーワード：北前船経済圏，薩州商社，本間家，戊辰戦争

1. 序論

戊辰戦争（1868～69年）は、従来、旧幕府勢力と新政府側雄藩とのあいだに生じた政治的・軍事的対立として理解されてきた。本稿はこの通説を否定するものではないが、酒田本間家および薩摩藩に関する史料をもとに、戊辰戦争を「日本海物流ネットワークをめぐる経済的利害調整の失敗過程」という視角から捉え直すケーススタディを提示する。

江戸後期から明治維新时期にかけて、日本海沿岸の海運ルートは、米穀や海産物を広域に流通させる大動脈として機能しており、北前船を通じて各藩の財政基盤が支えられていた¹⁾。

とりわけ討幕運動の中心勢力であった薩摩藩は、軍事・政治のみならず、物流および商流の掌握にも強い関心を抱いていた。黒糖など自藩産品の販路拡大と、他国からの米穀調達を同時に達成するため、薩摩藩は藩の出先機関であった商業組織「大和薩州産物会所（別名：大和方）」を発展させ、欧米の会社制度に倣った近代的商社「薩州商社（大和コンパニー）」の設立を構想した²⁾。薩摩藩は、この構想において、北前船経済圏において最大級の影響力を有していた庄内・酒田の本間家との提携を模索していた。薩摩藩は、本間家の一員を事実上の交渉担当者として起用し、日本海側の流通ネットワークを自藩の経済構想へと接続しようと試みた。この計画は、単なる一藩の商業政策にとどまらず、南北の地域経済を相互補完的に結びつけることを志向した点で、近代日本における株式会社の組織構想を先取りする試みであったと評価できる。

本稿では、薩州商社構想を現代の事業戦略論と対比させながら分析する。具体的には、本間文書などの公開資料および薩摩藩関係学術資料をもとに、薩州商社構想の成立過程を整理した上で、薩摩藩の構想が有していた特異性を明らかにする。さらに、薩州商社が意図した南北直結型物流ルートと、その中核を担うことが期待された庄内・本間家の役割を、現代の起業・経済圏形成に通じる歴史的ケーススタディとして考察する。

なお、本研究は歴史学の専門的手法による実証史学ではなく、筆者は所属する鶴岡工業高等専門学校において産学連携にかかわる教員として地元企業や文化団体と交流する上で、システム思考や事業戦略の視点から歴史事象を再解釈する試みである。

2. 経済物流ネットワークと戦略拠点

薩州商社構想が意図した南北直結型の物流ネットワークは、単なる商社設立計画にとどまらず、幕末期日本における経済秩序および流通構造の再編を志向した構想として位置づけることができる。本章では、この構想を一つの歴史的ケーススタディとして捉え、薩州商社が想定した経済補完ルートの構造と、その実現において中核的役割を期待された庄内・本間家の位置づけを検討する。

2.1 薩州商社の「南北経済補完」ルート

薩摩藩士石河確太郎らは、薩州商社構想において、薩摩産品と北国米を直接交換する南北直結型の貿易構造を

構想していた。この構想では、黒糖や薬材、琉球産品といった薩摩の戦略物資の販路拡大と引き換えに、慢性的に不足していた米穀を、羽州酒田（現在の山形県酒田市）の本間家をはじめとする北陸・東北の有力商人と直接的に結びつけることが意図されており、その内容は『酒田市史 第4巻 海運篇下』（247-252項）に公開された「薩州商社名籍」「薩州商社條書」（慶応3年6月）に記されていた。

この構想の特徴は、単に大坂市場への依存から脱却するという流通改革にとどまらない点にある。薩摩藩士石河確太郎を中心に構想された薩州商社計画は、生産・流通・資本・政治を一体として設計する経済システムを志向していた。以下は酒田市史により公開された本間文書と長谷川洋史の研究に基づき検討する。

第一に、生産と流通の統合である。薩州商社構想では、和州（奈良県）の商人から原綿を調達し、泉州堺（大阪府堺市）に設置予定であった紡績所において機械紡績を行い、その製品を自前の流通網によって販売するという、原料調達から製造、販売に至るまでを一貫して管理する産業モデルを石河ら薩摩藩側は目指していた。

第二に、藩営事業から会社組織への転換である。五代友厚や寺島宗則らが欧米で学んだ会社制度を参照し、藩資金のみに依存するのではなく、各地の町人や豪農から広く出資を募る合本組織の形成が構想された。「薩州商社條書」には第1条「壹株掛金五千兩と相定候事」、第2条「壹名にて幾株致入社候共、又、幾名にて壹株致入社候共可爲勝手事」、この2文から資本金5000兩の持分（株）を拠出することによって事業に参加する仕組みが定められており、近代的株式制度とみなしうる合本の出資形態が確認できる。

第三に、経済構想と倒幕戦略との連動である。物流網の整備は、平時の経済合理性のみならず、将来的な有事を見据えた兵站確保の観点からも重視されていた。当初は京都に近い大和（奈良県）が重視され、その後、交通の要衝である堺へと構想の重心が移行したが、薩摩藩がこれらを戦略拠点として位置づけたのは、商業的利潤に加え、政治的・軍事的拠点としての価値を同時に評価していたためである。このことは薩摩藩士伊地知壯之丞（貞馨）が大久保一蔵（利通）にあてた報告書にも記されている²⁾。

想定された物流ネットワークは、鹿児島から下関を経て日本海に至る西回り航路構築を基軸としていた。「薩州商社條書」には堺を本館（本社）とし、主要寄港地を枝館（地方支社）とする全国的な組織編制が構想されており、慶応3年（1867年）の「薩州商社名籍」からは、大坂・江戸・箱館に至る広域物流統合を視野に入れていたことが確認できる。この構想は、兵庫開港を契機として進行した外資流入に対抗し、国内資本を結集することで利益流出を抑制しようとする、経済防衛策としての側面も併せ持っていた。なお、慶応2年段階では下関を結節点とする交易・出資構想も試みられたが、政治的制約の下で実現には至らなかったことが指摘されている。

2.2 庄内・本間家との提携の意味

薩州商社構想において、薩摩藩は、庄内藩酒田港を拠点とする豪商・本間家を、薩州商社構想において不可欠のパートナーとして位置づけていた。本間家は江戸時代を通じて庄内・酒田湊の廻船問屋を務め、西廻り航路において巨利を得た日本海屈指の豪商であった³⁾。

本間家の特筆すべき点は、その経済的規模にとどまらず、庄内藩との間に築かれた密接な協働関係にある。庄内藩は、本間家三代目・光丘の代以降、飢饉や災害時の救済、幕府からの手伝普請（公共事業）、さらに藩内の砂防林植林や新田開発といったインフラ整備に至るまで、財政および実務の中核を本間家に委ねていた。

このように、本間家が藩政運営の実務を実質的に担う体制は、領民の間にも広く認識されており、その象徴として「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」という言葉が、現在に至るまで庄内地方で語り継がれている³⁻⁴⁾。

この関係性を現代の政治経済学的視点から捉えるならば、庄内藩が「外交・軍事・治安維持」といった公的機能に特化し、経済運営やインフラ開発を民間主体である本間家に戦略的に委ねた統治構造として理解することができる。筆者はこれを、国家機能の一部を民間に委託した「擬夜警国家モデル」と位置づける⁵⁾。このモデルは、理論上語られてきた夜警国家に近い統治形態が、幕末期の庄内という地方社会において実質的に成立していた可能性を示唆している。

薩摩藩にとって本間家との提携は、単なる資金調達を意味するものではなかった。それは、自力では構築困難であった日本海側の物流ネットワークと、長年にわたり蓄積された高度な商業的知見を、一挙に自藩の経済構想へ接続する薩摩琉球南方経済圏と蝦夷に至る北前船経済圏の接続を意味していた。この構想の実務的担い手として、慶応3年8月に薩摩藩から派遣されたのが、本間家の一員であり蘭学者でもあった本間郡兵衛である⁶⁾。

郡兵衛は、若年期に画家を志して江戸へ渡り、晩年の葛飾北斎に師事して雅号を北曜と称した。その後、長崎

において蘭学を修め、石河確太郎の招聘を受けて、薩摩藩の西洋学教育機関である開成所において英学師範を務めた。慶応3年(1867年)に庄内へ帰省する際には、薩摩藩家老より200両と親書を託されたとされている。

『酒田市史 第4集 海運篇：下』(246項)に収録されている庄内藩の調査記録「亀ヶ崎足軽御用帳」によれば、この親書には、「北国筋之儀厚御頼被思召(北国筋の品々について厚く依頼したいことがある)」「薩州問屋奉願度(薩摩の問屋として働いてもらいたい)」という記述が見られる。これらの記録から、郡兵衛が本間本家をはじめとする酒田の商家と接触していた可能性が高い。

以上の史料に基づけば、本間郡兵衛は単なる学者や商人というよりも、北前船経済圏の物流インフラを薩摩藩の経済構想へと結びつけるための交渉実務を担った存在であったと解釈できる。

このような役割は、詳細は後段の章で検討するが、薩州商社構想が単なる経済活動にとどまらず、政治的判断と密接に結びついて展開された藩間提携であった可能性を示唆している。

3. 薩州商社構想の挫折と経済戦としての戊辰戦争

3.1 政治的敵対と経済的軟着陸の模索

薩州商社による北前船経済圏接続構想は、幕末期の急激な政局変動の中で挫折することとなった。当時の庄内藩は、政治的立場と経済的合理性が必ずしも一致しない、きわめて複雑な状況に置かれていた。

庄内藩は徳川家康以来、徳川四天王家の一角を占めるといふ強い自負を藩士層の中に有していた。藩内政治においては、改革派が肅清された「丁卯(ていぼう)の大獄」を経て、佐幕派が主導権を掌握していた。その結果、慶応3年12月の江戸薩摩藩邸焼き討ち事件では庄内藩士が実行部隊の中核を担い、薩摩藩との関係は決定的な敵対関係へと転じた⁸⁻¹⁰⁾。

一方で、経済的側面から見れば、庄内・酒田は日本海物流を支える不可欠な結節点であった。酒田市の資料によれば庄内藩の下級武士である足軽の家禄は5石から8石程度にとどまり、慶応3年当時の米価(1両=1斗4升)を基準に換算すると年収はおおよそ36~57両に相当する¹¹⁻¹²⁾。

この水準は、開国による金銀流出・戦時的資金需要と流通不安により米価が上昇していた同時期において、実質的な購買力が低下していたと考えられる。

このような状況下において、薩摩藩が本間郡兵衛を派遣した背景には、表面的な政治的対立とは別に、武力衝突による経済的損失を最小限に抑えるための「軟着陸(ソフトランディング)」を模索する意図が存在していた可能性がある。本間家の物流アセットを保持したまま自藩の経済圏へ接続しようとする試みは、軍事的対決と並行して進められた経済交渉として位置づけることができる。

3.2 本間郡兵衛の死：交渉による解決の終焉

郡兵衛が薩摩から酒田に帰省した際に携行していたとされる資金は、親書とともに200両であったと前述の庄内藩の記録には記されている。慶応3年前後は、金銀比価の崩壊と戦時的資金需要の増大により米価が上昇するインフレ局面にあり、前述のように庄内藩の足軽が年収36~57両程度であったことを踏まえると、200両は下級武士の年収の約3.5~5.6年分に相当する。この金額は、旅費や餞別、あるいは私的使者への謝礼としては著しく高額であったと評価できる。

また、当時の国際決済が銀貨を基準としていたことを踏まえ、1両=60匁、1匁=3.75g、2026年1月時点の銀地金価格を約440.3円/gと仮定すると、200両は現在価値で約2,000万円に相当する¹³⁾。

郡兵衛については、「丸に十字」の薩摩藩島津家紋の羽織を着用して外出したため、庄内藩内の佐幕派から反感を買い「薩摩の間諜(スパイ)」と判断され、鶴ヶ岡城下において軟禁されたとする通説が存在する。しかし、薩州商社の定款に相当する條書には「みだりに薩摩の名を名乗ることを禁ずる」という趣旨の規定が含まれており、郡兵衛自身がその草案作成に関与していたとされる。交渉実務を担う立場にあった郡兵衛が、自ら定めた行動規範に反する軽率な振る舞いを行ったとは考えにくい。

以上を総合すると、薩摩藩家老級から郡兵衛に対して(1)親書、(2)200両という高額資金、(3)薩摩藩紋の羽織、という三点が一括して下賜されていることがわかる。この三点セットは、現代の企業で言えば、委任状・活動資金・社章に相当する。郡兵衛は単なる私的使者ではなく、薩摩藩を正式に代表して交渉および取引遂行にあたる、いわば「商務外交官」としての役割を担っていたと解釈できる。

慶応4年1月に戊辰戦争が勃発すると、庄内藩は奥羽越列藩同盟に参加し、旧幕府側として行動することとな

った。この時点で、薩摩藩との提携構想は事実上破談となったと考えられる。

郡兵衛は同年7月、軟禁先の鶴ヶ岡城下の親戚宅で急死した。その死因については、暗殺説や肅清説を含む諸説が存在するが、戦時下であったこともあり確定的な資料は出回っていない。

郡兵衛の急死が、新政府軍に加担していた新庄藩居城新庄城を、庄内藩が攻略した時期と近接している点は注目に値する。このことは、交渉による紛争回避を模索していた外交官としての郡兵衛が、戦局の激化に伴い、交渉継続を望まない藩内強硬派、あるいは外部勢力によって軟禁先で排除された可能性を示唆している。

このように死因は諸説あるが、ともかくとして本間郡兵衛の死をもって、薩州商社構想に象徴される薩摩藩の経済圏型経済戦略は、名実ともに終焉を迎えたと位置づけることができる。

4. 戦後における社会システムの衝突と帰結

戊辰戦争終結後、旧幕府軍の主力として戦った庄内藩に対する処分は、会津藩などと比較して相対的に軽微であった。通説では、西郷隆盛が武士道精神に基づき「降伏した者をないがしろにしない」という寛大な処遇を行った結果と説明されることが多い¹⁴⁾。しかし、この処分の背景には、戦後の新国家建設を見据えた、より実務的な判断が存在していた可能性がある。すなわち、薩摩側が本間家の有する日本海物流に関する高度な実務能力を、新政府の経済基盤として再編・活用することを視野に入れていたと解釈することができる。

この解釈を裏づけるものとして、明治期における人的・文化的交流の継続が挙げられる。明治10年(1877年)の西南戦争では、庄内出身の士族が西郷軍に義勇兵として参加する事例が見られ、かつて敵対した藩同士を超えた連帯が形成されていた¹⁵⁾。また、現在の酒田市には西郷隆盛を祀る南洲神社が建立され、鶴岡市と鹿児島市は現在に至るまで「兄弟都市」として関係を維持している。

さらに、明治8年5月(1875年)には、7代日本間家当主・本間光輝が、菅実秀を代表とする旧庄内藩鹿児島訪問団の一員として鹿児島を訪問している¹⁶⁾。この訪問は、薩州商社構想が制度としては挫折した後も、北海道から琉球に至る広域物流ネットワークの接続可能性が、形を変えて確認されていたことを示す商業的なデモンストラーションと位置づけることができる。

しかしながら、明治初期の本間家の紡いだ庄内と薩摩の連帯は、あくまで民間レベルの交流として継続したに過ぎないと筆者は考える。本間家が藩政期に担ってきた行政実務との協働関係は、廃藩置県をはじめとする明治期の制度改革の進展とともに解消されていった。本間家は海運・倉庫を主力とした民間業者として事業を継続する道を選び、地方行政の第一線から退いた。この統治構造の転換が顕在化したのが、明治6年(1873年)に発生し、明治13年(1880年)まで続いた「ワッパ騒動」である¹⁷⁾。

明治政府は地租改正を通じて、税制を年貢(現物納)から金納(現金納)へと移行させる制度改革を推進した。しかし、旧庄内藩士が実権を握っていた地方行政(酒田県など)では、この変更が農民に十分に周知されないまま、従来どおりの米納が事実上強要された。当時は米価が高騰しており、本来であれば現金納によって差額を農民に還元すべき状況であったにもかかわらず、現物徴収を継続することで、その差益が士族層への既得権益の維持に充てられていた。この対応は、現代的な視点から見れば、新制度への移行を拒否し、旧来の運用を無理に延命させた結果として生じた制度的な機能不全と評価できる。

この騒動の本質は、ガバナンスの空洞化にあったと考えられる。経済体制が急速に転換する中で、それまで財政実務を実質的に担ってきた本間家が、内部事情もあり公的領域の第一線から退いた。その結果、自前の経済運営システムを十分に有していなかった旧藩士層が地方行政を担うこととなり、新たな制度環境への適応に失敗した。この過程で、不正な取引や恣意的運用が常態化し、組織としての統治能力が自壊していったと理解することができる。

もっとも、このような制度的混乱は、庄内地域に特有の現象としてのみ捉えるべきではない。明治初期における急激な制度刷新は、日本各地で旧士族層と新政府の間に深刻な摩擦を生じさせていた。西南戦争をはじめとする士族反乱や各地の騒擾は、旧来の実務慣行や価値観が、新体制の制度論理と衝突した結果として理解される。庄内におけるワッパ騒動もまた、近代国家形成期において地方行政を担った士族層が直面した、構造的困難の一端を示す事例として位置づけられるであろう。

5. 結論

本研究は、薩州商社構想を幕末期日本における経済ネットワーク再編の試みとして再評価し、戊辰戦争を政治

的・軍事的対立にとどまらない、異なる経済システム間の衝突過程として捉え直すことを目的とした。

薩州商社が掲げた、自藩産品と北国米の直接交換による「南北経済補完」の構想や、欧米の会社制度を参照した広域物流統合の試みは、後の総合商社や財閥形成に先行する要素を備えていた。とりわけ、庄内・酒田の本間家を日本海物流の中核拠点として位置づけ、藩境を越えた流通ネットワークの構築を構想していた点は、当時としては先進的な経済戦略であったと評価できる。

しかし、この構想は戊辰戦争の勃発と、交渉実務を担っていた本間郡兵衛の死によって実現に至らなかった。この挫折は、単なる一商業計画の失敗ではなく、武力による強制的統合に代わる、経済的交渉を通じた「軟着陸（ソフトランディング）」という選択肢が失われたことを意味している。本稿で示したように、郡兵衛に下賜された200両は、当時の米価および庄内藩下級武士の家禄水準と比較しても著しく高額であり、交渉および取引遂行のための裁量的資金であった可能性が高い。この点は、薩州商社構想が単なる理念ではなく、具体的な実務段階に入っていたことを裏づけている。

また、戊辰戦争終結時における庄内藩への比較的軽微な処分についても、本稿は従来的人格論的解釈に加え、日本海物流の維持という経済的合理性の観点から再検討する視座を提示した。薩州商社構想を通じて共有されていた物流ネットワークの重要性は、戦後の人的交流や地域間連携の継続にも影響を与え、明治維新が単なる政権交代ではなく、経済システムの再編過程であったことを示唆している。

以上より、本研究は、薩州商社構想を未遂に終わった経済戦略として位置づけるとともに、戊辰戦争を「経済戦争」という分析枠組みから捉えることで、幕末維新期の地域経済と国家形成の関係を再考する一つのケーススタディを提示した。

6. 今後の課題

本研究は、本学および近隣図書館の所蔵資料、公的史料、既存の学術研究、庄内地方の通説・逸話、自治体公開資料、およびWikipediaなどのインターネット公開情報に基づく検討にとどまっている。とりわけWikipediaについては、学術的厳密性の観点から一次史料や学術文献での確認が望ましいが、地域の高専という資料アクセスの制約の中で、広範な情報への入口として活用した。今後の課題として、以下の三点を挙げたい。第一に、薩州商社に関する定款や書簡類をさらに精査し、資金調達スキームや交易品目の実態を定量的に明らかにすることで、構想の実務的成熟度を検証する必要がある。第二に、本間家側の記録や庄内藩の財務資料と突き合わせることで、郡兵衛の活動が藩内の恭順派や改革派の動向とどのように連動していたのかを明らかにすることが求められる。第三に、戊辰戦争期における加賀・越前・蝦夷地など他地域の商人ネットワークとの比較分析を行い、日本海北前船経済圏のダイナミズムをより多層的に捉え直すことが今後の課題である。

7. 結びに

筆者は、鶴岡工業高等専門学校において産学連携を担う地域連携センターの委員として、地元企業や文化団体と交流する上で、庄内地域の歴史を学習する必要性に迫られた。その過程で本間家および庄内の経済史を調査する中、薩州商社構想と実務家教員である本間郡兵衛の存在を知るに至った。とりわけ、酒田市史に記載された薩州商社條書が、現代における起業時の定款と相当する構造を有している点に着目したことが、本稿執筆の契機である。

筆者もこれまで複数のスタートアップ企業の立ち上げに携わってきた実務家教員でもある。その立場から見ると、150年以上前に構想された薩州商社の制度設計は、現代のビジネスにおいても通用し得る合理的なロジックに基づいて構築されている。また、本間郡兵衛や石河確太郎らが交わした書簡に見られる調整、交渉、資金繰り、構想の挫折といった実務上の課題は、筆者自身が経験してきた地域連携事業や起業プロジェクトの遂行過程と多くの点で共通しており、歴史資料を通じて現代的課題を再考する視座を与えるものであった。

薩州商社構想という未遂に終わった経済戦略を手がかりに、幕末維新期の地域経済と国家形成を経済ネットワークの観点から捉え直す試みである。その過程で明らかとなった知見を、本間郡兵衛をはじめ、日本の商業近代化の基盤形成に関わりながらも歴史の表舞台から姿を消した無名の実務者である先輩方に本稿を捧げたい。

8. 謝辞・利益相反関係規定

本稿執筆について史学的知見でアドバイスをいただいた東京科学大学大学院環境・社会理工学院 社会・人間科

学系吉田堯史氏に謝意を示す。

最後に、本学規定に基づき、本研究ノートの執筆にあたり、古語文章の現代語翻訳、文章校正・添削、情報の整理、文献検索（Google 検索 AI モードの利用を含む）に生成 AI を用いたことを明記する。

参考文献

- 1) 加藤貞仁：動く総合商社 北前船、2018年、https://www.kitamae-bune.com/_wp/wp-content/uploads/2018/02/kitamae48.pdf (2026年1月19日確認)
- 2) 長谷川洋史：薩州商社取建構想の推移：小松帯刀関係文書・石河確太郎関係文書を中心に、社会経済史学、第80巻、第3号、pp.395-414 (2014年)
- 3) 佐藤三郎：酒田の本間家、中央書院(1972年)
- 4) 鈴木 旭：本間光丘、ダイヤモンド社(1995)
- 5) Wikipedia：自由主義国家、<https://ja.wikipedia.org/wiki/自由主義国家> (2026年1月19日確認)
酒田市：幕末酒田の異才 本間郡兵衛、酒田市立資料館第208回企画展、<https://www.city.sakata.lg.jp/bunka/bunkazai/bunkazaishisetsu/siryoukan/kikakuten201-.files/0208.pdf> (2026年1月19日確認)
- 6) Wikipedia：本間北耀、<https://ja.wikipedia.org/wiki/本間北耀> (2026年1月19日確認)
- 7) 酒田市史編纂委員会：酒田市史 第4集 海運篇：下、酒田市 (1989年)
- 8) 本間勝喜：庄内藩（シリーズ藩物語）、現代書館 (2009年)
- 9) 鶴岡市役所：鶴岡市史、鶴岡市 (1962年)
- 10) 庄内の歴史ハンドブック (2026年1月19日確認)
- 11) 酒田市立資料館：武士の時代 中世庄内のつわものたち、第203回企画展、(2017年)
<https://www.city.sakata.lg.jp/bunka/bunkazai/bunkazaishisetsu/siryoukan/kikakuten201-.files/0203.pdf> (2026年1月19日確認)
- 12) 鶴ヶ島市教育委員会編：『鶴ヶ島町史』通史編、1989年（鶴ヶ島市立図書館／鶴ヶ島市デジタル郷土資料 <https://adeac.jp/tsurugashima-lib/text-list/d100010/ht041320>）、(2026年1月19日確認)
- 13) 田中貴金属：銀地金売買価格、<https://gold.tanaka.co.jp/> (2026年1月8日確認)
- 14) 長谷川信夫：西郷先生と庄内、(財)庄内南洲会 (1998年)
- 15) 安藤英男：菅実秀と庄内、聚近代文藝社 (1993年)
- 16) (株)コミュニティ新聞社：酒田湊繁盛史 (1992年)
- 17) 三原容子：ワッパ騒動研究史、東北公益文科大学総合研究論集、第17号

古典に対しては学習者の抱く嫌悪や苦手意識が取り上げられるが、「古典は意外と面白い」という方向へ意識の転換を図る働きかけが、小袖をデザインすることを通して可能となったと考える。インプリントだけではなく、アウトプリントするところまでを学びの一連の過程として授業を組み立てることが、学習効果をより一層高めると考える。

五．おわりに

古来、古典は表現の形を変え、現代へと享受され続けているが、その享受者の一役を担う初めの一步として、この小袖デザインは手軽に取り入れられる取り組みではないだろうか。絵の得手不得手に関係なく、文様等の昔からある素材や構図の組み合わせによって多様な表現ができる本実践は、思い切った提案をすれば、小学生でも取り入れることは可能であろう。探究活動・言語活動の一環として授業者の負担も少なく導入できる活動だと考える。物語の中でどの場面を切り取り、どのような表現手法を用いるかという組み合わせのアイデアは多岐にわたる。これまでの「伊勢物語絵」「源氏絵」といった絵の構図は比較的固定され、その定型の構図によって作品や場面がわかるという面白さがあるが、その枠にとられない新たな構図の提案が、古典の魅力を開拓することにつながるかと考えている。魅力を開拓する担い手になることこそが主体的な学びであり、それを可能にする古典教育を実践的に行い、これからも提案をしていきたい。

※『伊勢物語』本文の引用は『結ひの古典』に拠った。

(注)

1. 森木三穂 『結ひの古典』を用いた古典教育（『鶴岡工業高等専門学校教育研究年次報告』第一号 令和七年三月）

なお、『結ひの古典』は令和六年二月の小改訂を経て、令和七年三月にコラムや探究活動等の内容を充実させた改訂版が刊行される。

2. 早稲田久喜の会編 『学びを深めるヒントシリーズ 伊勢物語』（明治書院 平成三〇年三月一〇日）

3. 大修館書店編集部編 『トータルサポート新国語便覧 改訂版』（大修館書店 令和七年四月一日）

4. 斎宮歴史博物館編 「令和四年度特別展 NARIHRA—いにしへの雅び男のものごたり—」（図録 令和四年一〇月一日）より、「伊勢物語図色紙」（伝俵屋宗達筆 田中親美模写、昭和時代（原本 江戸時代、個人蔵）、「異本伊勢物語絵巻 巻三」（狩野晴川院（養信）・古藤養成 他模写、江戸時代（天保九年）、東京国立博物館蔵）を取り上げた。

5. 浅井了意 『新撰御ひながた』寛文七（一六六七） 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2541138>（参照 2026-01-27）

6. 文化遺産オンライン <https://bunka.nii.ac.jp/>

(参考文献)

・撫子凜 『小袖雛形ファッションブック イラストで楽しむ江戸着物の文様とデザイン』（株式会社マール社 二〇二四年四月二〇日）

・河田昌之・赤澤真理・大口裕子・伊永陽子 編 『伊勢物語 造型表現集 成』（株式会社思文閣出版 二〇二四年四月二五日）

・小山弓弦葉 『小袖 江戸デザインの粋』（東京国立博物館セレクトション）（東京国立博物館 二〇一九年六月二六日）

・小山弓弦葉 『日本の美術 第五二四号 光琳模様』（監修 独立行政法人国立文化財機構 至文堂 二〇一〇年一月一〇日）

・京都国立博物館編集 『工芸にみる古典文学意匠』（株式会社紫紅社 一九八〇年三月三一日）

矢絣模様 「出戻りしない」「まっすぐ進む」という意味があり、男が女を連れて、雨の中を必死に進む姿が、もう後戻りせずに二人で生きようという駆け落ちのように感じたため、戻らずに進む決意を表す矢絣の模様がこの場面によく合うと思いい、この柄を選んだ。

物語を理解したうえで古典文様を自分で調べ、物語にふさわしいものをデザインに組み込んだ、学習者の思いのこもった独創的なデザインである。

図7は小袖の中央部に「芥河」を指す「川」を配置しているが、物語には出て来ない「月」や「菊」を大きく描いている。これは女に焦点を当ててデザインしたものだという。

大事に、玉のように大切に育てられた女の儂さと可憐さを表した。高貴なイメージを持たせるために菊の花を描き、満月は物語が夜であること、女性らしさや手が届かないという意味を込めた。

とデザインの意図を語っており、内容を踏まえてモチーフを自分なりに組み合わせ派生させた好例である。

図8は物語に直接関連した要素は無いものの、「この神秘的な愛の形を誰にも邪魔されずにきれいなまま保つてほしい、という思いを込めた」とその意図を学習者は述べている。「桜」は恋心を表し、「網代模様」は魔除けの意味を持ち、男と女の淡い恋を邪魔するものから守ろうとする配置にしたという。またデザインの際に色付けはしなかったが、学習者からは、小袖の地の色は赤色Ⅱ魔除け、桜は紫色Ⅱ神秘、と色彩への言及もあった。授業において、『新撰御ひいながた』の雛形を元にしたと考えられる実際の小袖や振袖の画像を見せた(注6)ことも色彩への興味関心・こだわりにつながったのではないだろうか。

(注6)「ことも色彩への興味関心・こだわりにつながったのではないだろうか。物語内容を踏まえ、そこに描かれた思いと世界に対して自分がどう思うか、という考えを小袖のデザインという形で表現した非常に高い主体性が見られる事例である。」



図3



図4

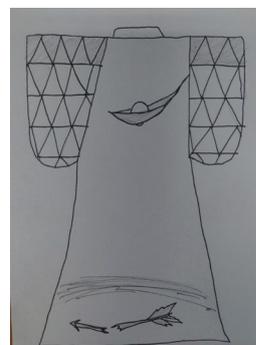


図5

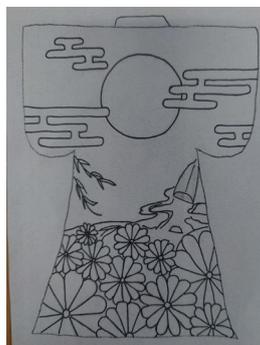


図7

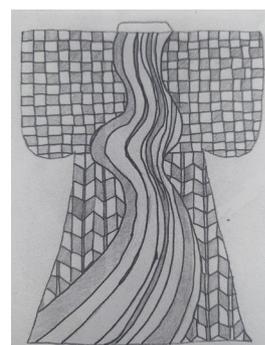


図6



図8

四. デザインすることの学習効果

同じものを見ても、読んでも、聞いても、味わっても、感じ方は人それぞれ異なるというのは当たり前のことだが、それをはっきりと突き付けられ、その面白さを実感できるのが、この表現の学習である。授業という同じ空間において初めて『伊勢物語』『芥河』を知り、学んだ学習者が、それぞれどのような受け止めをし、どの場面に注目して表現するか。そしてその表現のためにさらに自分自身で調べ、探究し、表現を工夫するという学びのサイクルを動かすきっかけとして本授業が機能したと言える。そして成果物を共有することで、他者の視点の違い、物の見方の違いを学び、視野を広げることが可能である。

また、この学習を通じた学習者の反応も古典に対する意識の変容が見られた。実践後のアンケートでは、『伊勢物語』『芥河』への理解の深まりとともに、小袖として表現することを好意的に受け取った学習者が八九%という結果になった。古典意匠という享受の形を自らの手で担うことで古典に対する興味関心を喚起した。単なる文学史や文法学習、話の展開の理解に留まらない学びの形が、主体的な学びを促進することにつながったのではないだろうか。しばしば、

ではなく、ゼロから自分たちで構想できる点も題材とするのにふさわしいと考え、デザインの題材として本作品・章段を選定した理由である。

学習者が『伊勢物語』第六段をどのように捉え、どのような要素・素材を用いて表現するのかを成果物を通して分析した結果、大きく次の五つの要素に分類できた。

【風景】（五五％）

【人物や鬼】（一七％）

【文様】（二三％）

【文字】（二〇％）

【伊勢物語】他章段（五％）

中には要素が重複しているものもあるが、今回はデザインされた小袖のメインとなる図柄で分類した。なお、『伊勢物語』他章段に分類したデザインの多くは、第九段「東下り」から「杜若」や「都鳥」をモチーフにしたものであった。授業者は課題の題材を第六段のみに限定したつもりだったが、第二三段をモチーフにした雛形を提示したこともあり、『伊勢物語』全般を対象と誤認した事例があったことは反省点である。

デザインの中で事例が一番多かった【風景】は、「芥河」の「川」、物語に登場する「雷」、男と女にとって重要な草の上の「露」の三つが素材として多く使用された。物語上は男女が川のほとりまで逃げて来て、雨・風・雷がひどくなって：という話の流れ・時間の経過があるが、デザインの多くが同時に描く「異時同図法」の構図を取っていた。【人物や鬼】は、授業で提示した伊勢物語絵の構図を踏襲したものが多く、男が女を背負う構図や鬼の狂気性を描くデザインがほとんどだった。【文字】はその中の五七％が「芥河（川）」であった。『伊勢物語』第二三段の事例の影響もあるだろう。工夫を凝らした事例では、物語中で男が詠んだ和歌の下の句（つゆとこたへて消えなましもの）を散らし書きする、という事例もあった。【文様】は単体ではなく、他の図柄と組み合わせられて使用される事例が多く、バリエーション豊かであった。選ぶ文様は「麻の葉」「鱗」の魔除けの意味を持つものや「七宝」「梅」の吉祥文様を選ぶ例があった。後述する事例でも触れるが、文様を用いる際はその文様の意味を調べ、「鬼から守るための魔除け」「男と女が幸せになつてほしいから吉祥文様で幸せを願う」といった学習者の思いが反映されたものが多く、作品を理解しただうえで学習者自らが考え、思いを表現している様相が見られたことも大きな特徴である。

三二二 事例紹介

ここからは具体的に学習者がデザインした小袖の事例を紹介したい。

まず、図3は風景のデザインである。「芥河」の内容に即したデザインで、「雷」「川」「雨」という要素は、やつとのことで盗み出した女を連れて男がたどりついた川のほとり、そして天候が荒れたことで女を鬼のいるあばら家に避難させてしまい：という話の展開の中心となる舞台を描いている。右上から左下へと大胆に描く雷が物語の猟奇性を示しているかのようである。

図4は人物と文字文様の組み合わせである。物語の後半部で、女は男に背負われていたことがわかるのだが、「芥河」を絵画化した作品の多くは川のほとりで女が男に背負われている構図である。（注4）図4はそれをベースに、小袖に大胆に描くデザインをした。「芥川」の文字文様を入れてあるもの、おそらく文字文様が無くともこの構図の絵によって『伊勢物語』「芥河」を示すと理解することは可能であろう。わかりやすさ、よりも、わかるひとはわかる面白さを考えた表現にするためには「芥川」が無いパターンのデザインが効果的だったかと考えるが、どちらにせよ、伊勢物語絵の典型的構図を上手く享受して描いた作品と言える。

図5〜7は物語に描かれたモチーフを用いながらも、独自の解釈や思いを込め、古典文様を組み合わせてデザインした事例である。その中でも図5は小袖の背面に描いた「露」と下部の「折れた矢」が男の象徴として、印象的に描いている。男に背負われ川のほとりにたどり着いた女は草の葉の上の露を見て、「かれは何ぞ」と男に問うが、男は答えなかった。その後、女は鬼に食われて姿を消してしまう。その男の悲しみを詠んだ歌が

白玉か何ぞと人の問ひしときつゆとこたへて消えなましものを

である。あのとき女が問うたことに答えることができなかった。そして一瞬にして消えてしまった。自分も一緒に消えてしまったかった、という男の悲しみがこめられた歌を象徴するものが「つゆ（露）」である。また、男は女をあばら家に避難させ、追っ手を警戒して弓と胡籙を背負っていたという描写から、矢を描いた。しかし男の望みは叶わなかったことを示すために「折れた」矢を描く、という工夫をしている。物語内容を咀嚼し、オリジナルのデザインに昇華させた好例である。

図6は小袖の中央に川を描き、上部に市松模様、下部に矢絰模様を描いたデザインである。学習者はデザインの意図を次のように語っている。

市松模様 「永遠」という意味があり、「芥河」に出てくる女と男がずっと一緒にいたいという思いを込めた。

鬼はや一口に食ひてけり。
の部分、

鬼／はや／一口／に／食ひ／て／けり。
ではなく、

鬼は／や／一口／に／食ひ／て／けり。

と分解する場合がある。「は」を口語文法の助詞と捉え、その後の「や」の訳に詰まるといふ現象が複数見られた。事前に本文の音読をすればこの躰きは解消されるものと考えられるが、あえて躰くことで口語と文語の違いを実感することを狙い、音読も行わずに現代語訳に挑戦させている。

その後、授業者は巡回しながらヒントを与え、学習者が発表できる状態にある事を確認した後、各グループの代表が担当箇所の現代語訳を発表し、授業者が章段全体の現代語訳と話の展開を解説し理解を深めるといふ流れをとった。この協同学習は、学生同士が相互に得手不得手を補い合い、互いの読みの違いをすり合わせながら課題を解決することを通し、学力だけではなく、お互いの意見を尊重し協調する力を養うことができる。なお、『伊勢物語』第六段に対する学習者個々の理解度や感想は、ミニッツペーパーを用いて確認する。ミニッツペーパーは授業中、学習者に記述させるコンパクトな質問用紙である。学習者が学習を振り返ることによって学習理解を深めるとともに、授業者にとっても学習者の理解度をすぐに確認することができるため、授業方法や解説方法の振り返りが可能になる有効な方法であると考え、授業で取り入れている。

さらに視覚的に理解を深める方法として「伊勢物語絵」（注4）を見せ、絵の解説を行った。物語がどのように絵画化・工芸化されていったのか、という具体的な享受の事例を見ることで、物語のイメージを深化させるとともに表現の多様性を知ることが目的としたためである。

また、小袖デザインの課題に取り組むための事前学習として、『新撰御ひいながた』（注5）を取り上げた。小袖とは日本の伝統的衣装の一つで、室町時代中期からは表着として男女を問わず着用されていたとされ、桃山小袖、慶弔小袖、寛文小袖、元禄小袖などの小袖の形式がある。『新撰御ひいながた』は小袖の形をした雛形にさまざまなデザインを掲載した、いわゆる「デザインブック」として活用された小袖雛形本である。小袖雛形本は江戸時代前期から中期にかけて刊行され、人々は雛形本を参考に小袖を注文していたとされる。（注6）例えば、図1は『伊勢物語』第三段「筒井筒」をモチーフに、文字文様で「井筒」と描いた小袖である。現代でも文字を入れた洋服はよくあるが、こ

れだけ大胆に小袖に描く、というデザインは学習者に新鮮に映ったようだ。文字をデザインとして活用するという、現代文化においてもごく当たり前にある発想が、江戸時代において既にあつたことを知り、現代との「つながり」を意識できたという学習者もいた。また、図2は『平家物語』「扇の的」をモチーフに、波と扇、そして矢を描いた小袖である。『平家物語』扇の的は、那須与一が海に漂う船の竿頭の扇を弓で射るといふ話である。図1のような大きなヒントになる文字文様は無いものの、学習者は中学校で『平家物語』「扇の的」を既習の場合が多く、絵を見るだけで「扇」「矢」「波」という要素から連想し、モチーフ作品を当てることができていた。小袖雛形本の学びを通して、絵解きのような楽しさを経験し、文学と生活のつながり、過去と現在のつながりを意識することが可能となった。視覚教材としても小袖雛形本は有用であると考え



図1『伊勢物語』筒井筒



図2『平家物語』扇の的

三、小袖をデザインする

三一 課題内容とデザインの傾向

『伊勢物語』第六段の学習内容を踏まえ、自分の力で作品を享受し表現する目的で小袖のデザインを実践した。前述の通り、『新撰御ひいながた』（小袖雛形本）を活用し、小袖のデザインには様々なバリエーションがあつたことを示すことで、デザインの自由度と完成系のイメージを共有した。その上で、一人一つ、小袖の背面・両袖のデザインを型紙に描いた。なお管見の限り、『伊勢物語』第六段をモチーフにした小袖のデザインは無く、既存のデザインの模倣

『結ひの古典』を用いた古典教育（二）―小袖をデザインする―

森木 三穂

キーワード：古典教育、探求学習、小袖、意匠

一．はじめに

『結ひの古典』とは、令和六年三月二五日に発行された高等専門学校の国語科教員七名（高専古典教育研究会）で編んだ古典教育のテキストである。これからの古典教育のあり方を検討するため、従来の検定教科書とは異なる作品を選出し、作品同士の「つながり」を意識した配列を行い、探究活動の可能性を探るベースとなる教材を作った。令和七年度は全国六高専で使用し、授業実践を通して古典教育の方法と教育効果を検証している。詳しい作製意図や経緯については拙稿（注1）をご一読いただきたい。

本稿では『結ひの古典』を用いた古典教育の中から、『伊勢物語』の授業実践を取り上げる。具体的には、『伊勢物語』の内容と物語が意匠化・工芸化され、後世の人々によって享受されてきたことを学ぶ。その上で、学習者も享受者となり、物語内容を踏まえた小袖をデザインするという課題に取り組み授業実践である。その教育成果・効果について報告する。

二．授業実践事例

二―一 『伊勢物語』第六段 芥河とは

『伊勢物語』は平安時代に書かれた歌物語である。各章段に和歌が入り、その和歌がどのような経緯で詠まれることになったかという詠歌の事情が物語の中で語られていることから、歌物語と呼ばれる。一二五段の章段から構成された「男」の一代記であり、その「男」のモデルは六歌仙の一人・在原業平と考えられている。取り扱う章段の違いはあるものの、『伊勢物語』は現行の高

等学校国語科検定教科書に掲載され、学校教育現場で扱う古典文学の典型であると言えよう。

第六段「芥河」は、ある男が長年恋焦がれた女をやつとの思いで盗み出すものの、逃避行の途中で女は鬼に食われてしまう、という衝撃的な展開が描かれる章段である。そして、大切な人を失った男の痛みと悲しみが男の和歌を通して、読んでいて心が苦しくなるほど切なく表現されている章段でもある。物語の後半部では、実は女は清和天皇に入内する前の二条后であり、鬼に食われたのではなく、兄たちに取り返されたのだと、実在の人物の名前を挙げて解説し、読者を物語世界から現実に戻す。その点から、「政治的な理由によって愛する女との仲を引き裂かれた「男」の物語として理解される」（注2）と読まれている話である。

二―二 授業の展開と学習者の反応

男の一寸な思いに見られる純粹な愛と猟奇的な話の展開。そして後半部の解説による物語の虚構性と政治的な歴史の流れを汲んだ現実との関係。古典文学の読解にまだ慣れていない学習者であっても、短いながらも話の展開が刺激的なため、物語内容を楽しんで読むことのできる章段なのではないかと考え、本章段を授業で扱うことにした。対象は鶴岡高専の本科一年生（四クラス 計一六二名）である。

まず、授業者が『伊勢物語』とはどのような作品かということ国語便覧（注3）に基づいて解説し、学習者は作品の概要を学ぶ。その後、物語内容を詳細に読解するため、学習者を一クラスあたり一〇グループに分け、取り上げる章段を一〇分割し、各担当箇所を割り当てる。分割の目安は二行〜三行程度である。学生たちは四名程度のグループで、担当箇所について辞書等を用いて協同で現代語訳に取り組み。ここでは授業者からの助言は一切しないため、品詞分解も学習者のみで行い、語句の意味を調べる。その結果、例えば

図書広報室

室長 菅野智城 (創造工学科 基盤教育グループ)

図書広報室 図書委員会

委員長 菅野智城 (創造工学科 基盤教育グループ)
委員 森木三穂 (創造工学科 基盤教育グループ)
" 櫻庭崇紘 (創造工学科 電気・電子コース)
" 笹原孝紀 (総務課 図書情報係)

※本年次報告に掲載された論文等については、
全て執筆者が責任を負うものとする。

鶴岡工業高等専門学校教育研究年次報告
第2号

令和8年3月発行

編集兼発行者 鶴岡工業高等専門学校
山形県鶴岡市井岡字沢田104